

秋吉台を支える住民と山焼き

中 安 直 子

カルスト台地として知られる秋吉台では、その草原景観を保つために、山焼きという人為的な働きかけが行われている。

その現状は、大きな局面を迎えている。弥生時代以来、台麓に住む住民によって続けられてきた山焼きが、それに参加する住民の高齢化と後継者不足によって、存続の危機にさらされている。秋吉台の山焼きは、日本でも最大規模と言われ、防火帯作りと火入れに参加する住民は約800人に及ぶ。その平均年齢は59.2才で、防火帯を作る草刈の作業が困難になってきた。ほとんど、草原の維持という観光目的で行われているために、住民のなかにはなぜ自分たちが、と疑問を持つ人もいる。

台麓で農業が盛んだった頃、住民たちは田に肥料として蒔くためや、役畜の飼料として台上の草を利用していった。また、台上のドリーネでも耕作が盛んに行われ、さらに陸軍の演習場としても使われていた。台上が有効に利用されていた時代である。

昭和30年代以降の近代化の時代には、農業の衰退で、採草やドリーネ耕作もされなくなり、住民と台の関係は次第に薄れていくこととなった。

そして観光化の時代になると、台の地底にある秋芳洞と、珍しいカルスト台地の風景を求めに、

観光客が押し寄せるようになった。住民の必要性から行われてきた山焼きも、観光イベントにさえなっている。

このように台上の利用は変化し、住民による採草や耕作などの利用は不必要になった。しかし、昔からここに住んできた住民には、台に対する愛着がある。それは、台との関係が薄れてしまった今日でも無くなっていない。そして、そのような愛着を内に持っていながらも、台へ行く頻度は減少し、その関係は疎遠である。さらに、現在の観光化した台上を、観光化と切り離して見ている。住民の台に対する見方というのは、彼らの生活に根ざして作られていて、今、住民の台に対する目は冷めていると言える。

このような見方を持った住民の態度というのは、そのまま山焼きという行為に対しても反映されているようだ。山焼きをする理由を住民に訪ねると、決定的な答えが返ってこず、「昔からやっているから」という今までの習わしに従っていることが分かる。つまり、秋吉台の山焼きは、今までの勢いによって、惰性で行われているのだ。こうして、観光目的となっても、周辺の住民によって草原は維持され、支えられているのである。